

現在、カミュが死守するもの！

アンヌ・プルトー

『結婚』の中に響きわたっている「ずっと先に」のあの拒否は、この忘れがたい抒情的な表現にのみ限定されるものではない。世界の美しさを肌で感じ、感動した一人の青年のロマンチックな叫びの彼方に、要するに現在の詩学のようなものが浮かびあがり、文体の、登場人物たちの、政治的な行動方針の、私が関心を払っていたありとあらゆる事柄の兆しが現れている。とはいえ、「私は私の著作の中に、私の全生活を、私の全人格をいつも注入した。純粹に知的な問題とはどのようなものなのか、私は知らない」というニーチェの言葉 — ルネ・シャールは 1957 年にこの言葉をカミュに当てはめているのだが — が示唆しているように、経験とエクリチュールとを切り離さなかったとされているカミュという作家の生の中に、現在への感受性が立ち現れるための条件とは何なのだろうか？

現在へのこの感受性を明らかにしてくれるように思える自伝的な要素はさまざまだが、ここでは、誕生の地、病気という試練、貧困の体験を取りあげたい。これらの要素が、何よりもまず文学的なテキスト、たとえば『結婚』や『夏』や『最初の人間』、さらにはまた『手帖』といったテキストからも浮かびあがってくる、先ほどの問題提起を生み出しているからだ。それではどうして若い頃のこうした経験が、現在への感受性 — 後に見るように、多義的なかたちをとるのだが — の十全な開花を助長する場となったのだろうか？

時間を支配することを第一に可能にしたもの、それはおそらくは、その周縁部や限界をも含め、カミュの生それ自体であろう。瞬間の響きわたる地である、誕生の地のおかげで、カミュは神々しいばかりの輝かしい体験を享受することができた。つまり、美しさに、始原の諸特性を永遠に保持している不滅の美しさに、見とれることができたのである。死の遍在性 — その現実的感覚が精神を傷めることは後で問題としたいが — が、ダモクレスの剣のように作用し、カミュの心の中に明白な危機感をつのらせる。最後に、貧困の体験により、すぎるものといっぺんは現在しかない人々 — というのも、貧困の故に、彼らは仮借なく閉ざされた空間と時間の中で生きることを余儀なくされているからなのだが — 、そうした人々の傍らにカミュは身を置くことができた。そのような貧困の「内部と傍ら」と同時に身を置くこのようなカミュの特殊な立場については、詳述しなくてはならない。このような特別な立場に身を置いていたが故にカミュはある種の距離を保つことができ、美しさへと開かれてもいる現在から排除されている人々のために証言することが可能となったのである。

カミュという人間の生涯にこのように眼差しを向けることは、意義深いことだ。現在という瞬間への執着は、不条理の感情の中に根づいている、未来の拒否にもその刻印を残している。現在という瞬間への執着はまた、地上への執着としても現れ、〈今〉と〈ここ〉とを分離不能のものとする。それはまた、残存性の概念を、つまり瞬間の持続性の概念を生み出しもする。最後に、切迫という概念によって特徴づけられる時間との存在論的關係

によって、急がなくてはいけないという概念も生み出す。過度なまでの伝記重視に陥らずとも、カミュの実生活に関する諸要素が、時間に対するこのような関係の文学作品の中で開花を促す、地下にある緯糸のようなものを形成していることを確認できるのである。それにカミュは、ピンダロスから借用した、「ああ、わが魂よ、不死の生に憧れてはならぬ、可能なものの領域を汲み尽くせ」という言葉を『シーシュポスの神話』の雄弁なエピグラフとしたのではなかったか？